

『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』 ～ 『対話を成り立たせる』 ～

2023年6月14日 本郷3丁目で、筆者の母校である島根県出雲市の出雲高校の同級生 佐藤典久氏(日本産業医支援機構 代表取締役社長)と昼食をする機会が与えられた。筆者は、1969年4月に開設された理数科の一期生である。【理科や数学の学習を中心とした専門教育を行い、将来科学技術の研究・開発や医療の進歩等に指導的な役割を果たす人間を育てることを目標としています。】とある。筆者の故郷は、人口約40名の出雲市大社町鵜嶋である。隣の鷺浦地区と合わせて、『鵜鷺(うさぎ)』(小学校 & 中学校は廃校;画像)と呼ばれている。713年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。

筆者は、2014年『神在月シンポジウム ～ がん治療とその後の生活 ～』(出雲市)での講演『医師の2つの使命 ～ 純度の高い専門性と社会的包容力 ～』で帰郷した。『八百万の神々が全国から出雲に集う神在月にあわせて、地域の皆様を対象として、健康・医療について語り合うシンポジウム』と謳われていた。講演後は、区長をはじめ村民の方々と、夕食を共にしながら、『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』を語った。翌年2015年に、鵜嶋小学校の体育館で、『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』シンポジウムが開催されたものである。そして【東京いずもふるさと会会報『出雲』第9号(2015年)の特別寄稿『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』】(画像)の機会が与えられたことが、今回鮮明に思い出された。

1894年箱根の『夏期学校』で、内村鑑三(1861-1930)が『誰でも実現可能な生き方』を語ったのが『後世への最大遺物』(内村鑑三著 岩波文庫 1908年)に繋がった。内村鑑三の『だれとも対話を成り立たせる語り口』は、故郷の原景と共に筆者の『がん哲学外来』の原点でもある(画像)。『日本が嘗て生み得た人物中最大の人物』として『内村鑑三・新渡戸稲造(1862-1933)』を学ぶ日々である。

6月14日午後は、順天堂大学保健医療学部 診療放射線学科の2年生の『病理学概論』と『がん医療科学』の講義を担当した。『がん医療科学』では、筆者の『がん細胞から、学んだ生き方 ～ 「ほっとけ 気にするな」のがん哲学』(へるす出版)の第5章の【『クオリティ・オブ・デス』を考える】を音読しながら進めた。

鷺鷥メディカル・ビレッジ 構想

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授
樋野 興夫
(鷺鷥小学校・鷺鷥中学校・出雲高校 卒業生)



人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」である実感する深い学びの時が与えられている。その時、その人らしいものが発動してくるであろう。「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こすものであろう。「自分の命より大切なものがある」ということを知ることは、「役割意識&使命感」の自覚へと導く。「練られた品性と練々たる余裕」は「教育の真髄」である。「責務を希望の後に懸さない、愛の生みたる不屈の気性」が「人生の扉の要」の如く廻る。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。

今から約1300年前、712年に編纂された『古事記』に登場する、医療の原点を教えてくれる大國主命の出雲大社から、8キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、私の生まれ育った出雲市大町鷺鷥である。鷺鷥浦地区と合わせて、鷺鷥と呼ばれている。713年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。その村で、我が生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(boys be ambitious)である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラークが、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。もちろん、当時の私は、クラークのことも札幌農学校のことも知らず、クラーク精神が新渡戸稲造(1862-1933)、内村鑑三(1861-1930)という後に、私の尊敬する2人を生んだことも知らぬまま、ただ、鷺鷥小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぼつと希望が灯るような思いであったものである(鷺鷥小学校、鷺鷥中学校は既に廃校)。これが私の原点であり、そして19歳の時から、自らの尊敬する人物を、静かに、学んできた。その人物とは、南原繁(1889-1974)であり、上記の新渡戸稲造・内村鑑三であり、また、矢内原忠雄(1893-1961)である。

鷺鷥は無医村であり、幼年期、熱を出しては母に背負われて、峠のトンネルを通過して、隣の鷺鷥浦の診療所に行った体験が、今でも脳裏に焼き付いている。私は、人生3歳にして医者になると思ったようである。医師になり、すぐ、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、また大きな出会いに遭遇したのである。病理学者であり、当時の癌研究所所長であった菅野晴夫先生(癌研顧問)は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。南原繁には、ますます深入りし、さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者吉田富三(1903-1973)との出会いに繋がった。吉田富三は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、2003年、吉田富三生誕100周年記念事業を行う機会が与えられた。吉田富三の論文、著作を熟読し、こ

メディカルカフェ
に
ようこそ

3

「がん哲学外来」の原点は、 故郷にあり！



「がん哲学外来」の原点は、故郷にあり！

豊かな故郷に生まれた
理想的な環境で、
メディカルカフェ開催！

多摩センター駅からバルテノン大通りを登った丘陵地帯に広がる「多摩市立グリーンライオンスタジアム」。開設21年目を迎え、多摩市と東京女子医科大学、そして多摩市グリーンボランティア連絡会の三名が協力し、新しい緑の空間を創造していく施設に装いを一新。そのキックオフイベントが4月29日に開催されました。当日は、大勢の市民も参加し、オープニングセレモニーに続き、樋野先生による「がん哲学外来」多摩メディアカルカフェ」と題した講演会と市民参加のメディアカルカフェも開催

されました。とくに印象的だったのは、ユーモアを交えて樋野先生が語った「がん」という病気の本质。がん細胞を「内なる息子」に例えたり、やさしい解説に、来場者からは爆笑が起り、和やかな雰囲気になりました。「親元風貌」の樋野先生の人生の原点や「がん哲学外来」の原点も明かされた今回の講演会の内容を誌面でご紹介します。

「われわれの故郷」
新渡戸稲造と南原繁
その意義とは？

追求めたことでした。彼がつくったこの委員会は、今日のユネスコ「国際連合教育科学文化機関」に受け継がれています。いまの日本で、こんなスケールの大きなことを誰がやるのでしょうか？

新渡戸稲造という、武士道」を思い浮かべる人が多いことでしょう。タイムスから「古臭い精神世界」を連想するのかもしれないですが、国際平和を追求する精神性の高きはいまでも通用するものです。困難な時代だからこそ、ぜひ読んでいただきたい。

私は、「われわれ21世紀の新渡戸と南原」という本を書きましたが、河井道さんとの話に戻りますが、彼女は「わたしのラジアン」という著書の中で、前向きで、前進

追求めたことでした。彼がつくったこの委員会は、今日のユネスコ「国際連合教育科学文化機関」に受け継がれています。いまの日本で、こんなスケールの大きなことを誰がやるのでしょうか？

新渡戸稲造という、武士道」を思い浮かべる人が多いことでしょう。タイムスから「古臭い精神世界」を連想するのかもしれないですが、国際平和を追求する精神性の高きはいまでも通用するものです。困難な時代だからこそ、ぜひ読んでいただきたい。

私は、「われわれ21世紀の新渡戸と南原」という本を書きましたが、河井道さんとの話に戻りますが、彼女は「わたしのラジアン」という著書の中で、前向きで、前進

がん哲学外来

メディカルタウンを追いもとめて

樋野 興夫

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授

